

ヒロシマ・ 音の記憶

Vol.4 ~継承~



広島学生協会の催し「ヒロシマと音楽」の開催風景
広島高等学校（現 広島大学附属中・高等学校 講堂）にて

広島公演

2013.12.1 (日)

開演 14時00分 (開場13時30分)

場所 広島大学附属中・高等学校 講堂
広島市南区翠一丁目1-1

主催

「ヒロシマと音楽」委員会

〒730-0012 広島市中区上八丁堀 8-14-5F

NPO法人 ANT-Hiroshima 事務局内

TEL (082)502-6304

Mail hirongaku@hirongaku.com

Web <http://hirongaku.com/>

- 財団法人広島市未来都市創造財団
広島市文化振興基金助成事業
- 公益財団法人ヒロシマ平和創造基金
ヒロシマピース・グラント助成事業
- エネルギー文化・スポーツ財団助成事業

後援

広島市、広島市教育委員会、
広島市文化協会、中国新聞社、中国放送、
広島テレビ、広島ホームテレビ、
テレビ新広島、広島エフエム放送

ご来場の皆さまへ

「ヒロシマと音楽」委員会が、「ヒロシマ」をテーマとする音楽作品を記録し、データベース化を行う活動を始めて18年になります。今日もなお、「ヒロシマ」をテーマとする新しい作品が生まれ続けています。「ヒロシマ」は時代の変化とともに常に新たなインスピレーションを人々に与え、創作させる大きな力を持っているようです。また当委員会は、機会あるごとに、様々な企画のもと楽曲の音源化に努め、コンサートを開催してまいりました。

本日のコンサートは「ヒロシマ・音の記憶」シリーズのVol.4です。「音」の中に眠る^{おと}広島^の記憶に耳を澄ませたいという願いから始まり、Vol.1～出会い～、Vol.2～繋がり～、Vol.3～歩み～、Vol.4～継承～とコンサートを続けてきました。音楽には無限の可能性と喜びがあり、絶望的な状況の中にあっても、人を生へと導く力があるようです。かつて「ヒロシマ」を生きた若人と「ヒロシマ」を受け継ぐ若人が、音楽を通して、出会い、繋がり、歩み、継承していく過程を、本日のコンサートを通して皆さまに感じていただけましたら、何よりの喜びです。

本日はご来場いただき、本当にありがとうございました。

2013年12月1日
「ヒロシマと音楽」委員会
委員長 渡部朋子



企画にあたって

「・・・やっぱり音が欲しかった。優れた歌が欲しかった。」

「広島学生音楽連盟」結成時の思いについて、原田雅弘さんが述べた言葉です。被爆の翌年、荒廃した広島を復興させたいという思いで集まってきた若者たちにより結成された「広島学生音楽連盟」。チャリティー・コンサートを開き、壊れた校舎やピアノを修理する費用に充てていたそうです。けれども、あの日を境に死と向き合い続けていた若者たちを再び突き動かしたのは、好きな音楽を好きな仲間とともにやりたいという、ただそれだけのことだったのかもしれませんが。結局、その熱い思いは「ただそれだけ」に終わらず、多くの人を巻き込みながら戦後の広島に豊かな種を蒔いていきました。

「広島の音楽史」を辿る過程で私たちがみつけたこの「広島学生音楽連盟」の活動は、長らくの間、活動に参加した人々の間でのみ語られる存在でした。歴史に埋もれつつあった若者たちの熱い思いを多くの人に知ってもらおうとともに、現在の若者たちが抱く熱い思いも同時に伝えられたら・・・これが本日の企画の意図です。通常のコンサートとは少し趣が異なりますが、被爆から現在につながる長い歩みをご自由に感じていただければ幸いです。

本日はご来場ありがとうございました。

「ヒロシマと音楽」委員会
企画担当 能登原 由美

第一部

ドキュメンタリー映画上映

「音の記憶・つながり」 (68分)

出演：原田雅弘、千葉佳子、

崇徳高等学校グリークラブ、広島女学院高等学校音楽部、安田女子高等学校音楽部、ほか

監督・撮影：青原さとし

企画：「ヒロシマと音楽」委員会

製作：「ヒロシマと音楽」委員会、NPO法人ANT-Hiroshima

*** 休憩 ***

第二部

弦楽演奏 「ラルゴ」

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル 作曲

合唱 「菩提樹」 (歌曲集《冬の旅》より)

ヴィルヘルム・ミュラー 作詩 / フランツ・シューベルト 作曲 / 近藤 朔風 訳

「流浪の民」 (《3つの詩》より)

エマニュエル・フォン・ガイベル 作詩 / ロベルト・シューマン 作曲 / 石倉 小三郎 訳

「信じる」

谷川 俊太郎 作詩 / 松下 耕 作曲

独唱 「私の愛しいお父さん」 (オペラ《ジャンニ・スキッキ》より)

ジャコモ・プッチーニ 作曲

「ある晴れた日に」 (オペラ《蝶々夫人》より)

ジャコモ・プッチーニ 作曲

「ヒロシマ、一九四九年八月六日に寄せる歌」

エドマンド・ブランデン 作詩 / 山田 耕筰 作曲 / 寿岳 文章 訳

合唱 「ヒロシマ平和都市の歌」

大木 惇夫 作詩 / 山田 耕筰 作曲

(以上、管弦楽編曲：原 寛暁)

*16時30分 終演予定

「広島学生音楽連盟」の活動の様子を追ったこのドキュメンタリー映画は、「ヒロシマと音楽」委員会が現在も継続して行っている「広島の音楽史」記録・編纂のためのインタビュー調査がそもそもの始まりである。被爆の翌年に合同合唱団を結成し、学校復旧の資金を得るために郊外の小学校などでチャリティー・コンサートを開いていたという話、さらに「一流の音楽を広島に」という思いから、東京から一流の音楽家を招き、僅かに焼け残った学校講堂などで演奏会を開催したという話、聞けば聞くほど若者たちの生への情熱を感じずにはいられなかったが、彼らの活動が関係者以外にはほとんど知られないままになっていることも、その後すぐに知った。当時16～18歳だった彼らはすでに80歳は越えているはず。この記録を関係者の証言をもとに残していくには今、動かなければならない。駆られるようにして映像作家、青原さとし氏に撮影を依頼し、インタビューを記録し始めた。2010年のことである。

翌2011年6月に行う予定だったコンサート「ヒロシマ・音の記憶 Vol.2～繋がり～」では、短編映像として彼らの活動を紹介し、市内の高校生による合同合唱団を結成して当時を振り返るという企画を進めていた。そのチラシが完成し、市内施設への発送作業をしている最中に、あの東日本大震災が起きた。繰り返し報道されるその映像を見たときに頭に浮かんだのは、合同合唱団に歌ってもらうことになっていた《土の歌》の歌詞。広島出身の詩人、大木惇夫によって詠まれた反核・平和を訴えるこの詩を若者に歌ってもらう意味は何なのか？65年前、荒廃した故郷を復興させるために奔走した若者の思いを未来に伝えるとはどういうことか？当時だけを記録するのではなく、現在の若者の思いやエネルギーも記録にとどめ、さらに、時を超えた若者たちの邂逅の場を記録に残しておく必要がある。そうした思いが募り始めたのはその頃ではなかったかと思う。

それから2年、被爆後の、そして今の若者たちの音楽の軌跡を辿ることになった。今夏、ようやくドキュメンタリー映画として完成させ、広島市内で一般公開を果たすに至る。何十年か先になってもこの映画を見た若者がつねに何かを感じてくれれば・・・映画を製作した私たちにとってはそれだけでも十分満足である。

2013年12月1日

「ヒロシマと音楽」委員会
NPO法人ANT-Hiroshima

<本日の演奏曲について>

本日のコンサートでは、選曲にあたって次のいずれかに当てはまるものであるよう心がけた。つまり、「ヒロシマ」に関わりのある音楽作品であること、本日上映する映画に関連があること、そして、出演する高校生たち自らが選んだ曲、である。このうち、「ヒロシマ」に関わりのある作品で、近代日本の洋楽界の重鎮、山田耕筰の手になりながらもほとんど日の目をみることのなかった作品、いずれも1949年に作曲された2つの作品についてここでは紹介したい。

「ヒロシマ、一九四九年八月六日に寄せる歌」

英国の詩人、エドモンド・ブランデンによって作詩された。被爆の3年後に広島を訪れたブランデンはその復興の様子に感銘し、翌年、1949年8月6日のヒロシマ平和祭に寄せる一篇の詩を書いた。山田耕筰によって混声合唱曲となった本作は、その平和祭で広島放送合唱団によって披露されている。本日の演奏では、助川敏弥氏により独唱用に編曲されたものを使用している。

「ヒロシマ平和都市の歌」

広島市出身の詩人、大木惇夫によって作詩された。「国境の町」の作詩者として知られる大木だが、本日の映画の中では合同合唱団によって歌われている《土の歌》の作詩者でもある。「鎮魂歌 御霊よ地下に哭くなかれ」の詩碑のある平和公園や、晩年にひっそりと暮らした三滝寺など、広島市内では大木の詩碑を幾つかみることができる。

「ヒロシマ、一九四九年八月六日に寄せる歌」 エドモンド・ブランデン詩 寿岳文章訳

一、
かの永劫の夜をしのぎ
はやもいきづく まちびとの
うちひしがれて うつつとも
夢ともわかぬ ひとことの
うらみも言はで 颯爽と
立ちあがりたる 心意気

二、
とはに亡びし もののあと
たちまち動く 力あり
劫火の灰を かきわけて
ねがい さやかにあれいでぬ
身をおこしたる このまちは
明日をめざして ひとすぢに

三、
ヒロシマよりも 誇らしき
名をもつまちは 世にあらず
君は平和の鳩の巢よ
をちこちびとは ここに来て
よみがへりたる 人類の
かがやく姿 みるらむか

「ヒロシマ平和都市の歌」

大木惇夫詩

一、
三篠川 デルタにつどふ
やすらぎの使徒、智慧ふかきもの
過ぎし日のわざはひに 今なべて目ざめたり
さきがけて 地に象す
やすらひの都 ヒロシマ
たのもしや この土
光みち、花はひらかむ
ああ、われら、土に種子まき
とこしへの幸を呼ぶなり

二、
二葉山 みどりをよるふ
よるこびの民、度ましきもの
大いなる道のため 今なべてはげむなり
よみがへり 起ちあがり
荒れ塚に築くや いしづゑ
明るしや この山
ああ、われら、額に汗して
ヒロシマの民と呼ばれむ

三、
波しづか、世界とやわす
瀬戸内の海、美はしきもの
地の上にたたかひを 今なべて避くるなり
調べよく 愛を展べ
靑空をゆるする 揺籃
きよけしや この水
折りみち、虹はかからむ
ああ、われら、榮えを領けあふ
やすらひの民を呼ぶなり

Profile



乗松 恵美 (ソプラノ)

広島市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科ソプラノ専攻卒業。同大学大学院独唱科修了。現在、京都市立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程在学中。マダム・バタフライ国際コンクールin長崎 優勝。ひろしまフェニックス賞、広島文化賞新人賞受賞。2009年テグ市(韓国)国際オペラフェスティバルに招待歌手として参加。(財)地域創造公共ホール音楽活性化支援事業アーティスト。現在、故郷の広島を拠点に、数多くのオペラや合唱曲ソリスト等、各地で演奏活動を行う。Studio N.A.Tより、ファーストソロアルバム「console」をリリース。日本演奏連盟、日本音楽学会会員。広島文化学園大学講師、エリザベト音楽大学非常勤講師。ミリオンコンサート協会所属。



広島大学附属高等学校 合唱班

私たち合唱班は、中学生・高校生一緒に活動しています。年間での発表の機会は、4月の新入生歓迎会、6月の文化祭、8月の定期演奏会、11月の合唱フェスティバル、附属小合唱祭などがあります。定期的に、OBの猪原龍吉先生にもご指導いただいています。ルネサンス期のマドリガルから現代の合唱曲、J-POPなど、いろいろなジャンルの曲に挑戦しています。学年を超えた仲の良さや歌う楽しさを大切に、音楽を探究しつづけていきたいと思っています。



広島大学附属高等学校 管弦楽班

私たち管弦楽班は吹奏楽から転向して今年で42年目となります。毎年8月の定期演奏会を最後にその年の高校2年生が運営を引退し、現在は高1～中1の約80名で活動しています。去る8月10日にフェニックスホールにて開催した第37回定期演奏会では、「ライオンキング」や難曲「幻想交響曲」などにチャレンジし、好評を得ることができました。本日は、ステージキャパの関係でフルオーケストラの出演はできませんが、高校生を中心とした小編成にて参加させていただきます。よろしくごお願い致します。



青原 さとし (監督)

ドキュメンタリー映像作家。1961年広島生まれ。広島を拠点に地元を中心としたドキュメンタリー映画を次々に制作している。代表作：2003年『土徳－焼跡地に生かされて』、2004年『雪国木羽屋根物語』、2006年『望郷－広瀬小学校原爆犠牲者を探して』、2007年『藝州かやぶき紀行』、2010年『三百七十五年目の春風』、2011年『タケヤネの里』『時を鑄込む』、2012年『大遠見見聞記』、『イトー・ターリパフォーマンス ひとつの応答in原爆ドーム前』、2013年『御相続』。現在、福島県相双地方を舞台にした『土徳流離』を製作中。

「広島学生音楽連盟」について

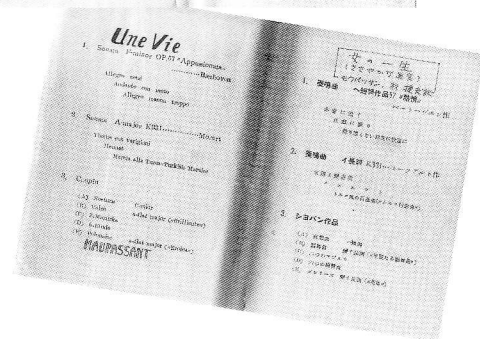
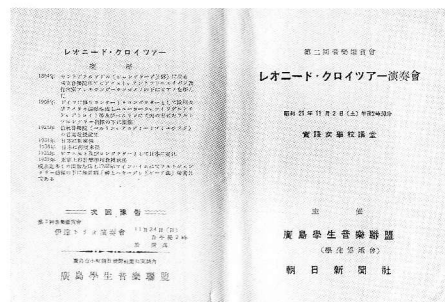
被爆の翌年、広島の学生たちが集まり合同合唱団を結成した。参加したのは広島高等学校、広島女子専門学校、広島女学院専門学校、広島高等師範学校、広島高等工業学校、広島実践高等女学校の生徒たち。彼らは自らを「広島学生音楽連盟」と称し、戦時中には歌うことのできなかつたさまざまな音楽に手をのびした。たとえば、「流浪の民」や「野ばら」などのドイツ歌曲は日常のレパートリーに、大きな行事になるとヴェルディやブラームスの「レクイエム」などにも挑戦した。

だがそれだけではない。彼らは市内に残ったほんの僅かな建物を使い、日本を代表する音楽家を次々と招いてコンサートを開催した。目的の一つは、学校の復興資金を集めるため、もう一つは、広島を音楽で元気にするため。たとえば次のようなコンサートを企画する。

- 第1回 四家文子独唱会
昭和21年10月28日 広島鉄道局講堂
- 第2回 レオニード・クロイツァー ピアノリサイタル
昭和21年11月2日 実践女学校講堂
- 第3回 伊達トリオ演奏会
昭和21年11月24日 広島高等学校講堂
- 第4回 山上雅庸ピアノリサイタル
昭和21年12月15日 場所不明
- 第5回 豊増昇 ピアノリサイタル
昭和22年1月18日 場所不明

【日時が不明のもの】

- ・宮原淳子ピアノリサイタル
広島鉄道局講堂
- ・柴田睦陸、長門美保による「蝶々夫人」(コンサート形式)
旭劇場
- ・四家文子独唱会
広島高等学校講堂



焼けた市内を文字通り東奔西走する彼らの活動は、昭和25年3月、主要メンバーの揃う広島高等学校の廃校とともに幕を閉じた。



広島学生音楽連盟卒業生送別音楽会 1948年2月11日
<写真資料提供：原田雅弘>